

ウラシマソウ

春のやわらかな風が校庭を渡り、草花が静かに季節の訪れを告げています。

そんなある日、校門に立つ安全ボランティアの方が、ふと声を掛けてくださいました。「校庭に外来種の危険な植物があったので、抜いておきましたよ」と。その植物は「アメリカオニアザミ」という植物でした。鋭いトゲをもつため、取り扱いには少し注意が必要な植物だそうです。かつて牧畜の飼料として海外から輸入された牧草に種子が混ざり、八王子にも根付いたものといわれています。一見、何気ない草のように見えるその一株の中にも、土地の歴史が息づいていることに、思わず足を止めました。

話をさらに伺うと、「近くに珍しい草花がありますよ」との一言。その言葉に導かれ、学校の外へ付いて行くと、そこには、これまで見たこともない不思議な花が静かに咲いていました。



それは、左の写真に写る花。その名を、「ウラシマタロウソウ？」と、いうそうです。私に興味をもたせてくださるために、昔話と結び付けてくださいました。（詳しく調べてみますと、正式には、「ウラシマソウ」とあります）

細長く伸びる糸のような姿は、まるで釣り糸のようであり、その名の由来にも思いが至ります。

こうした草花にふれながら、改めて感じたことがあります。それは、私たちの身近なところに、まだ知られていない学びの種が数多く存在しているということです。アメリカオニアザミやウラシマソウについて深い知識をもつ安全

ボランティアの方が、日々子供たちの安全を見守りながら学校を支えてくださっている。このことは、もしかするとこれまであまり知られていなかったことかもしれません。しかし、その存在こそが、本校の教育を豊かにする大きな力であると感じています。

本校では、「子供たちを真ん中にした教育」を大切にしています。その実現のためには、学校だけでなく、保護者・地域の皆様とともに、子供たちの学びを支えていくことが欠かせません。

教育とは生活そのものであり、日常の中にある出会いや気づきこそが、子供たちの学びを深め、主体的に考える力を育てていきます。地域の方々の知恵や経験にふれることは、子供たちにとって、教科書だけでは得られない豊かな学びにつながります。今回の出会いを通して、ぜひこうした方々にも、子供たちの学びに関わっていただきたい。そんな思いが、自然と芽生えました。

安全ボランティアさんの草花の話に導かれ、気が付けば時間を忘れて夢中になっている自分がいました。まるで、浦島太郎のように。ただし、玉手箱は開けずに。これからも子供たちとともに、新しい学びを一つずつ開いていきたいと思えます。